

「サプライズ」

— 2 稿 —

2023/8/6

米俵

〈人物表〉

岩上 武 (40) 中小企業のサラリーマン、営業
藤川 千賀子 (45) 編集者

〈ログライン〉

武は、千賀子にプロポーズするが、千賀子の告白を聞いて後悔する話。

〈ねらい〉

武が感じる後悔の気持ちに共感したり、笑ったりして欲しい

1. 千賀子のマンション・室内（夜）

20階程度のマンション。最上階。広いLDK。高級家具で揃えられている。

アイランドキッチンで、岩上武（40）鼻歌を歌いながら料理をしている。味見をして、満足気に、

武 「（発音良く）Perfect」

（以降、英文は発音良く）

武、ソファの方を見る。

ブランドのバッグ、ストール、服が散らかっている。

武 「Not perfect」

1つずつ拾い、抱えて部屋から出ていく。

× × ×

真っ暗な部屋。玄関から鍵を開ける音。

藤川千賀子（45）部屋に入り電気のスイッチをつける。45才には見えない（20代の容姿）

男受けを意識したワンピース。ブランドのバッグ。

武、電気がつくと同時にクラッカーを鳴らして、

武 「Surprise」

千賀子、驚くが、すぐに笑顔になる。

千賀子 「たけし、来てたんだー」

と大袈裟に喜び、武に抱きつく。

武、千賀子にキスをする。

武 「夕食も用意したよ」

千賀子 「やったー、たけしのご飯大好き」

武、ワインを見せて、

武 「千賀子の大好きなマセットも用意したんだ」

千賀子 「嬉しい！ 今日、何かあったっけ？」

武、笑顔のまま何も言わない。

千賀子 「えーなにー」

武 「後でね、ほら、早く着替えておいで」

武、千賀子の背中を押して誘導。

千賀子、急に立ち止まって、

千賀子 「あっ……」

武の方を振り向き、満面の笑みで、

千賀子「私もね、大事な話あるよ」

武、紳士的に

武「なんだろう。そっちの方が気になるな」

千賀子「あとでねー」

そうやって、部屋を出ていく。

武、料理を並べる。

千賀子、ブランドの部屋着を着て戻ってくる。

千賀子「いい匂いー」

武「ほら、早く座って」

椅子を引いて、席へ誘導する。

乾杯する2人。

千賀子、料理を一口食べて、大袈裟に、

千賀子「美味しいー」

武「良かった」

笑顔で見つめ合う2人。

武、立ち上がり、千賀子の足元に片膝をつけて座る。

指輪の箱を開けて、

武「千賀子、結婚しよう」

千賀子、口を両手で押さえて、嬉しそうに頷く。

武、千賀子の左手を取り、薬指に指輪をはめる。

武「幸せになろう」

千賀子「凄い嬉しい……覚えてくれてたんだ」

千賀子、指輪をうっとり眺める。

武「指輪？ 当たり前でしょ」

千賀子「このシチュエーションも……」

武、立ち上がり、千賀子にキスをして、

武「姫の仰せの通りに」

笑い合う2人。

千賀子「私たち2人なら、大丈夫だよね？」

武「絶対上手くいくよ」

武、残っていたワインを一気に飲む。

武「で？ 千賀子の大事な話って？」

千賀子「実はね……」

と言いながら、携帯を取り出す。

千賀子「これ見て」

千賀子、武に携帯画面を見せる。

(携帯画面) 武と女性がホテルへ入っていく動画。

千賀子、悲しそうな顔で、

千賀子「偶然ね、本当に偶然。見ちゃったの」

武「……」

千賀子「さっき、プロポーズしてくれたのにね……」

武、千賀子の足元に土下座をする。

武「本当に申し訳ない」

千賀子「認めるんだ……」

武、土下座をしたまま、

武「違う。気の迷いというか……」

千賀子「これ見た後ね、ちゃんと調べたんだよ」

武、驚いた顔で千賀子を見る。

千賀子「上原仁美さん、200万円。高杉愛さん、500万円。

波多野早紀さん、320万円。加藤恵美さ——」

武、千賀子の言葉を遮る。額を床につけて、

武「ごめんなさい。本当にごめんなさい。申し訳ありません」

ん」

千賀子「詐欺してたんでしょ？」

武「何でもする。警察には……」

千賀子「ねー、武。顔上げて」

武、ゆっくりと頭を上げて、千賀子の顔を見る。

千賀子、満面の笑みで、

千賀子「Surprise」

武、情けない声で、

武「へ?」

千賀子、明るい声で、

千賀子「私からのサプライズだよー」

武「どういうこと?」

千賀子「武、さっきから謝ってるけど、私の顔よく見て」

武、千賀子の顔をじっと見る。

千賀子、満面の笑み。

千賀子「ね。怒ってもないし、泣いてもない」

武 「え……なんで？」

千賀子 「とりあえず、あっちにいかない？」

ソファの方を見る。

千賀子 「この体勢じゃ、私が虐めてるみたいでしょ」

と楽しそうに言いながら、ソファへ誘導する。

千賀子、武にくっついて座り、

千賀子 「あのね……私、嬉しかったの」

武 「え？」

千賀子 「最初はね、ムカついて悔しくて、殺っちゃおうかなって

思っただけど……」

武 「やっちゃおう？」

千賀子、武の言葉を無視して、

千賀子 「調べたら、詐欺で……でも、考えてみたら、私はお金取

られたことないなって」

千賀子、左手に輝く指輪を愛しそうに眺めながら、

千賀子 「もしかして、私のためにやってくれてたのっかなって」

武、焦ったように、

武 「そう……そうなんだよ！」

千賀子、武の方を見て、

千賀子 「もう、バレバレだよ」

武、安心した表情。

千賀子、武の方を見る。笑顔で、

千賀子 「私もね、同じなの」

武 「え？ 詐欺してるってこと？」

千賀子 「パパ活」

武 「パパ……」

千賀子 「私たちの時代で言えば、援交かな」

武 「ん？ 私たちの時代？」

千賀子 「あれ？ 武、勝手に部屋入ってるから、もうバレてるか

とと思ってた」

千賀子、バッグから免許証を取り出す。

武に見せながら、

千賀子 「ほら」

武、免許証を確認したまま、

武 「45才……」

千賀子 「そうそう、凄いでしょ？ 最近の技術」

千賀子、立ち上がり、くるくると回ってみせる。

武、千賀子を見つめる。

千賀子 「もちろん、努力もしてるよ。おばさんに見える人って肩にお肉がついてるんだって」

千賀子、自分の肩を撫でる。

千賀子 「顔だけいじる人に違和感を感じるのは、そのせいだって聞いたから、トレーニングしてるよ」

服を少しあげて、膝を見せて、

千賀子 「あつ、あとね、膝も……」

手の甲（両手）を見せて、

千賀子 「手にも年齢が出ちゃうから気を付けてるしー」

左手の指輪が輝く。

千賀子 「首とデコルテもね。結構大変なんだから」

首とデコルテを武に触らせる。

武の横に座り直して、上目使いで、

千賀子 「今のところね。バレたことないんだよ」

武、言葉を絞り出して、

武 「うん……凄いね」

千賀子 「この服もこの部屋もパパが買ってくれたし、バッグもインテリアもほとんどパパからのプレゼントだよ」

千賀子、部屋を見渡しながら、

千賀子 「私買ったのはね……」

IKEAの白いシンプルな時計を手に取り、

千賀子 「この時計ぐらいかな」

武 「このソファも？」

千賀子 「もちろん。こんな高級ソファ、私の仕事じゃ買えないでしょ」

武、ソファの背もたれをぎゅっと掴む。

千賀子 「ね、一緒でしょ」

武、言葉が出ない。

千賀子 「武もやめないでね」

武 「詐欺のこと？」

千賀子「そうそう。だって、女の人誰も怒ってなかったんだよ」

武「えっ……話したの？ 全員と？」

千賀子「当たり前でしょ」

武「……」

千賀子「お金も返して欲しいって言ってなかったの。凄いよ」

武「そうかな……」

千賀子「そうそう、詐欺の天才。2人なら絶対上手くいく……でしょ？」

千賀子、笑顔で武を見つめる。

時間を確認して、

千賀子「あ、そろそろかな……」

武「何が？」

千賀子「私ね、武と違って別れ方下手くそなの」

武「……それで？」

千賀子「だから、面倒臭いのはいつも殺っちゃうの」

武「やっちゃう？」

千賀子、首を締める動作をしながら、明るく、

千賀子「そう、殺っちゃう」

武、黙る。

千賀子、武の耳元で、

千賀子「だから、今日は手伝ってね。後片付け」

マンション入口からのインターフォンが鳴る。

千賀子「準備出来たら呼ぶから、隠れてて」

千賀子、インターフォンに応答する。

武、何も言わずバルコニーへ出る。

バルコニーの策に手をかけ、夜空を眺める。

少し身を乗り出して下を見る。

最上階から見下ろした景色。

振り返って部屋の様子を見る。

ダイニングテーブルの上に武の携帯。

部屋に男が入ってくるのが見える。

千賀子の左手の薬指に光る指輪。

武、大きく溜息をつく。

(おわり)